



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	グローバル化時代の大学 : 違いを認め合う共生社会を目指して
Author(s)	サコ, ウスビ//講演; Sacko, Oussouby; 結城, 幸司//聞き手 他
Description	北海道大学ダイバーシティ&インクルージョン推進宣言制定記念講演会 第1回記念講演 : 大学と民族. 2021年12月10日, 北海道大学学術交流会館およびオンライン. 札幌市
Relation	(2022). 北海道大学ダイバーシティ&インクルージョン推進宣言制定記念講演会記録集 北海道大学ダイ バーシティ・インクルージョン推進本部
Issue Date	2022-05
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/85723
Type	lecture
File Information	01Sacko.pdf



北海道大学ダイバーシティ&インクルージョン推進宣言 制定記念講演会

第1回記念講演：大学と民族

「グローバル化時代の大学 –違いを認め合う共生社会を目指して–」

日 時 2021年12月10日（金）18:30-20:00

開催方法 北海道大学学術交流会館およびオンライン

講演者 ウスビ・サコ（Oussouby SACKO）氏

京都精華大学学長。マリ共和国生まれ。国の派遣により北京語言大学、南京東南大学で学ぶ。1990年、東京で短期ホームステイを経験しマリに共通するような下町の文化に驚く。91年来日、99年京都大学大学院工学研究科建築学専攻博士課程修了。博士(工学)。専門は空間人類学。「京都の町家再生」「コミュニティ再生」など社会と建築の関係性を様々な角度から調査研究している。京都精華大学人文学部教員、学部長を経て2018年4月から現職。

聞き手 結城幸司（ゆうき こうじ）氏

アイヌ・アート・プロジェクト代表。1964年釧路市春採出身。2000年「創作者集団アイヌ・アート・プロジェクト」設立。札幌アイヌ協会国際文化部長、「アオテアロア・アイヌモシリ交流プログラム」副代表。木版画家、木彫作品、現代アート作家、ミュージシャン、環境問題を題材にアニメーション作品「七五郎沢の狐」、朝日出版「トワトワト」挿し絵、フランスルーブル美術館にて神話語り（2011年）。

司会 加藤博文（かとう ひろふみ）氏

北海道大学アイヌ・先住民研究センター長



ウスビ・サコ 京都精華大学学長



結城幸司 アイヌ・アート・プロジェクト代表(右)
加藤博文 北海道大学アイヌ・先住民研究センター長(左)

加藤 みなさま、本日は「北海道大学ダイバーシティ&インクルージョン推進宣言」に係る記念講演会にご参加いただきまして、誠にありがとうございます。記念すべき第一回の講演会ということで、これから講演者として、京都精華大学のウスビ・サコ学長にまず講演をいただき、その後アイヌ・アート・プロジェクトの結城幸司さんを交えた対談をしていきたいと思えます。限られた時間ではありますが、よろしくお願いたします。それではウスビ・サコ先生、ご準備ができましたら講演をよろしくお願いたします。

サコ ありがとうございます。時間もないのでスタートをさせていただきたいと思えます。皆さんこんばんは。さきほど紹介がありました、京都精華大学のウスビ・サコといいます。北海道大学のダイバーシティ&インクルージョン推進宣言おめでとうございます。当然のことながら、日本の大学で先頭を切ってダイバーシティとインクルージョンを推進するというはあんまり数がない中で、この大規模な北海道大学がそれをやったというのは、非常に心強い限りであります。皆さん引き続きよろしくお願いたします。それでは私の講演に入りたいと思えます。

タイトルは「グローバル化時代の大学」。我々がどういう風にこれから日本の大学を変えてゆくか、ということで、話をするようになりました。私は今回の話は、自分の経験を中心に展開しようかな、という風に考えています。基本的には自分の背景を語り、そこから概念のお話をさせていただいて、また、世界の中の日本をどういう風に見られているか、最後に大学へのメッセージができたという風に思っております。

このスライドに示されていることは、基本的に私はマリ生まれで、日本には三十年間ほど住んでいると。マリでも日本でも常に影響を受けているのが、欧米諸国である。この三つのいわゆる三角関係から、私の話が展開できたという風に思っております。

私がこの話を受けて考えたのが、北大がダイバーシティ&インクルージョンの話をする中で、たぶん北大も含めて皆さん感じられているのが、社会の変化ではないか、という風に私は思っております。この社会の変化を、皆さんそれぞれどういう風に考えるのか。私なりのクエスチョンマークを打ってみたところでありませぬ。共同体から集合体へと社会基盤が変化する中で、多様な人々がどのように共同して生活、仕事、さまざまなことをしていくのか。あとテクノロジーが発展してきて、我々のコミュニケーションの仕方も変わってきてると思うんですが、その中でどのように我々の共同体を維持するのか。これまで想像しなかった社会課題が結構多く出現している。それらの解決には、もはや論理的思考だけでは不十分であろう。社会変革とリベラルアーツとの関係は、どういう風に捉えるのか。これからグローバル化された社会の中で、新たな価値を創造する必要があると思われませぬ。社会が分断する中で、誰がどのように行動すればいいのか。このような話を今回の講演会では取り上げたいと思っております。特に、さきほどの総長の挨拶にもあったように、私が外から日本社会に入ってきて、日本社会をどういう風に見るのか。もしかしたら、日本人自身がそれが当たり前だと思われているものも、私が非常に変わったものだと見てしまうので、耳の痛い話もさせていただきたいと思えます。

私の研究は空間人類学なんですが、集合体・あるいは共同体、人々が集まっているその空間と、意思との行動関係というのをずっと世界各地で調べてきました。人間観察だけではなく、人々が関わっていく中で記号であったりとか、行動であったりとか、生活の知恵であったりとかですね、そういうものも観察をしてきたのが私の研究であります。

さきほど私の紹介にもありましたが、私は2018年4月から京都精華大学の学長を務めております。任期はあともう少しではありますが、この京都精華大学、私が学長になった時に一つのビジョンを発表して、「リベラルアーツ」、「グローバル」、「表現」というものを基盤にですね、大学教育を作っていくということにいたしました。

京都精華大学の建学理念には、人間尊重・自由自治と書いてあります。学生たちにとって、自由って言われてもあんまりピンとこない。自由の精神というのは、そこに自治があると。この自由自治について、私は学長になってから一年生の授業で自由論を担当して、一年生と自由とは何か、ということを議論しております。

また、学生は大切な人間であると。教員も職員も学生も同等の人間である、という扱いを大学の中でどう実現していくかということでもあります。特に最近、留学生が増えている、私が学長になる頃はわずか10%近くしかいない留学生が今、27%にも伸びている。この3分の1の構成員が留学生であるということがどういう意味をなすのか、我々が多様性あるいはダイバーシティ&インクルージョンを尊重すること以外には、方法がない訳です。

京都精華大学は2017年にダイバーシティ推進センターを発足して、私が学長になった年にダイバーシティ推進宣言を制定しました。ちょっと中身が細かいので全部言えませんが、先ほどマイノリティ・マジョリティの話が出てきたんですが、私が精華大学の構成員、誰もが自分の居場所をこの大学で求める権利がある、更にそれが尊重される、という権利もあると。そういう意味でお互いの差があるのは当たり前なんです。みんな同じだというのは、それ自体はおかしいと思うんですが、この差というのをあんまり問題にしない、むしろそれをお互いに認め合うことによって、更

に前進していくことを私は考えたわけです。だから一人一人異なる属性を複数皆さん持っていて、お互いの属性の違いの中で新しい大学の共同体を作っていくというのが、この大学の宣言であります。

ちょっとまとめると、多様性を認め、学び合う。違いと共に成長していく。これを一つの宣言文にして、この京都精華大学のダイバーシティを推進しています。当然単なる言葉だけで通じないので、我々がこれまでやってきた取り組みはさまざまですが、例えば学生の名簿には男女を書かない。更に学生の呼び名は皆で統一する。みんなが使えるトイレとか、食堂の食材を明記するとか、LGBTQをはじめマイノリティを尊重するような制度を作ったり、いろいろなことをやってきてダイバーシティ推進センターを設置してます。その中で、まだまだ我々は十分ではないと思われませんが、これから北大と一緒にこれが一校の大学、二校の大学ではなくて、日本社会が変わっていくことが大切だと思っています。是非一緒になってやっていきたいと思えます。

学長として私が目標で設置した数字があるんですが、ダイバーシティとSDGsは5年以内に全面的に普及したいと思ってます。留学生を40%に引き上げたい、外国人教員の割合を30%。更に、外国籍職員の割合を増やしたい。女性役職者の割合も増やしたい。最近何をやってるかと言うと、30%未満の女性の教員がいる学部学科、あるいはコースは、女性限定の応募をしております。いろいろなことはあるでしょうけど、意識的にやらない限りできない。と私は思いますので、意識的にやっているところです。

本題に入りたいと思えます。まず、私自身から自分を理解する前提で、私は何者なのか、ということ。私はマリのバマコ、首都で生まれて、兄弟3人の中の長男になります。ただ私の家には、常に20人から30人ぐらい住んでいました。それはどういうことかと言うと、首都バマコに住むと、お父さんお母さんの田舎から都市・都会部に出てきて、用事があるという風におっしゃるんです。その人達が用事があると言って、その日のうちに用事を済まさない。次の日に用事はどうですか？って聞くと、急いでおりません、とおっしゃる。そのうち一か月、一年間住み着いてしまうんです。

私は小さい頃、家に住んでる半分以上が、あなたは誰なの？といったところで生活してきたわけです。この中で学んだのが、それぞれが持っている違い、あるいは価値観の違いを小さいながら対応していくことが重要ということです。しかもそれぞれが私の教育によく口を出してきてたんです。決してそこで親がやめなさいとか、うちの子どもにものを言うな、というのは一切ありません。居候と思われる食費も宿泊費も払わない人たちが、私を育ててくれた。私はその多様性の中で生活してきたわけです。

ちょっとマリをのぞきたいと思います。マリというのは、西アフリカの真ん中に位置している国で、右側の地図を二つ見ていただくと、緑はかつてフランスの植民地だった国々です。その下の薄い青色の国は、今フランス語を公用語とする、あるいは主要言語とする国々です。マリはちょっと簡単に見ていただくと、マリの国の言葉、公用語はフランス語になります。23ほどの民族がありますけど勉強、仕事、あるいはオフィシャルな文章はすべてフランス語になります。

広さは日本の3倍ぐらい、人口は約2,000万人近くです。ただ人口増加率は3%以上ありますので、毎年一定の人口が増えてくる。特に都市部に集中することが多いです。マリは90%の国民が、イスラム教を重視しております。その他キリスト教、あるいはアニミズム、自然崇拜などあります。独立してまだ間もない国ですが、こういう形で成立しています。

民族を見ていただくと23ほどの民族がいます。人種でも北部の人達は、肌が薄くてベルベル系とトゥアレグ系の人達、南に行くと黒人系が増えます。私自身はソニンケという民族になります。ただ私が話せる言葉で言うとバンバラ語、フランス語、マリンケとソニンケが少々になります。

マリはかつてガーナ王国、マリ帝国あるいはソングイ帝国が栄えた地域です。だから非常に文化が古く、8世紀ぐらいから黄金の国と呼ばれ、サハラ交易とかマグレブの国々との交易が盛んな地域でもありました。私はどういう風に自分を紹介するのかは、今回の講演会をきっかけに書いてみました、私の民族、私はソニンケ族 (Soninkés) です。マリ共和国のソニンケ族です。これは基本的にセネガル共和国、あるいはマリにある民族です。ソニンケ族は、ガーナ王国に起源を

持つ、セネガル川流域の内陸部に定住してる民族です。でも、サハラ交易で活躍をした民族です。

私の家族背景、父方の祖父はワガドゥ (Wagadu)、いわゆるガーナ王国のソニンケ族です。父方の祖母はフタ・ジャロ (Fuuta Jaloo) というところのフラニ族 (Fulani, Peul) であります。母方の祖父はギニアの方からのソニンケ族であります。母方の祖母は、ヴァスル (Wassoulou) という地域のフラニ族であります。

これを見るだけで、私自身はかなりミックスされていると感じています。例えば私を外見で見て、シンプルにマリ人ですね、とか、なになに人ですねって言われても、私の中に非常にいろいろなものが混ざっているということです。生まれ育ったのがバマコ。でも、一部の生活をしたのはセグーというバンバラ王国の場所です。こういう風に一人の人間というのは、実はかなり多様化している。これはたぶん日本人と同じじゃないかと思われま。ただマリの場合は、民族が違ったら文化とか言語も変わってくる、ということです。だから私は言語体験で言うと、さまざまな言語が喋れる。これは単なるファッションとかそういうものではなくて、この言語を喋ることによって自分が生活してきたわけです。

私は高校卒業直後に、マリの国費留学生として中国に渡りました。これは私が出発する前夜で、親戚がパーティをしてくれているんですけど、いまだにマリに帰る度に、この親戚達が集まってきて、プレゼントは？って言われます。マリのコミュニティはなかなか熱いものであります。

中国の留学で初めて人種を意識したんです。それまでマリにいる時に、なになに族とか、なになに族はいるけど、それを「人種」という視点で見たことないです。でも中国に行くと、あなたは黒人、あなたは色が落ちないの？とかあなたは顔立ちが違う、とかあなたは猿なのか、とかって非常にいろんなことを言われてきました。その中で私は建築を学び、建築の教室でスケッチをする時に、中国人たちが私のスケッチを見て、かなりいろいろな批評をしたりします。

初めて人種を認識し、いろいろな留学生とよく交流しました。私の部屋に皆さん集まってパーティをしたり、一緒に映画見たりする、あるいはみんなで一緒にサッカーしたりすることがありました。中国で感じた区別・

差別というのは、中国人は遠慮なく関心を示す。なんで黒いの？って雰囲気で聞く。中国人はアフリカに抱いたステレオタイプのイメージは常に確認したがるんです。

日本人は、ステレオタイプのイメージがあるかもしれませんが、確認はあまりしない。中国人は黒人留学生全般を、常に中国人と比較する。例えばスポーツをすると、黒人のくせに遅いとか言ってくる。最終的には中国ってというのは喧嘩は結構しました。ただ、仲直りが早いので、根に持たないです。だから私は非常に中国にいる時に、ストレスフリーだったんです。喧嘩はいつでもできるし、仲直りもいつでもできる。好きなことを好きな時に、言いたいことを言いたい時に、という生活。

日本に渡って、日本語学校に半年間ほど通って京都大学に行きました。京都大学でまず私は二つのことに疑問を持ちました。一つは「割り勘」ですね。私が来たのが90年でよく皆さん飲みに行くんです。私はお酒一滴も飲まないのに、割り勘をする。誰もそれに疑問を持たないです。更にこの「同じ」っていう文化ですね。私はマリで学校に進むにつれ、留年制度だったりいろいろなことがあって、必ず同じ学年イコール同じ年というのはないです。その中で、皆さんは「先輩後輩」という文化が非常に強くて、私もそれにかなり戸惑いました。

そのあと京都精華大学に渡りました。私は中国と違って日本で感じたのは、まずアフリカ出身者といった瞬間に、多くの日本人に私は動物が大好きですか、とおっしゃるんですね。それはそうかもしれませんが、私はマリの日常生活の中で、あんまり動物見たことないので、動物園はあるんですけど、お金がないから動物は少ないです。実はしっかりライオン見たのが日本、あるいは中国に来てからです。でも常にアフリカ出身イコール動物が近くにいる、目が良いと十キロ先のライオンが見えると。

あるいはムスリムということは、かなり日本でも珍しかった。食事制限があることは、なかなか認識が薄かったです。

あとは日本人が使う言葉で、大したことないかもしれないけど、「肌色のものを取ってきて」。肌色のものってどうなんだ？っていうのはあるんです。マリでは絶

対肌色っていう言葉はないし、肌色は何を指すのかも分からないです。よく出てくる話は、写真で歯が白いから歯を出してって言われるんですけど、これって全部、たぶん皆さんの日常生活の中で、本当に悪気なしで言ってる言葉だと思うんです。でも私はそういうのを見た時に、日本が非常に他者を意識する、というプロセスは、非常にちょっと変わってると思ったんです。

私自身が日本にやってきたのが、留学生十万人計画の時代だったわけで、教育・友好・国際協力ということをベースに、留学生をたくさん日本に呼んできた。私は早速京都府の名誉友好大使になって、日本社会をさまざまな角度から勉強させていただきました。

ただ、阪神大震災を機に、自分の生活はいつべんにも変わった。どういうことかと言うと、在住外国人、あるいは外国人市民として、日本社会とどのように共生すべきか。これを考える必要があると思った。日本社会、あるいは近隣住民との関わり、交流プロセスとリテラシー、あとは自分の文化をきちんと皆さんに伝えることをした。決して自分は、お客さんではないっていうことをやりました。

早速、留学生のボランティア組織を立ち上げて、留学生による留学生のボランティア、あるいは日本人の交流、これは自ら我々が日本社会の中にできることは自分達で提案していく。フェスティバルやったり日本語教室を設けたり、いろいろなことをやってきました。ただ私はやりたかったのが、日本に同化することではなくて、自分の居場所を開拓するというのがメインです。

でも、日本では assimilation (同化) というのがポイントになってきて、日本で一生懸命やってる人は、日本流にやってください、日本人のようにやってください、いわゆる日本人のまねごとをやってください…これってやっても間に合わない訳です。私は違いの中に自分の役割があると思った。だから日本でのインテグレーションの話で、mutually agreeable という言葉があるんですけど、お互いに認め合わなければ共生社会ができないと思った。

私は、本当にいろいろなことをやってきた中で気付いたのが、外人という方ですね外国人に期待すること、役割期待に応えろという話です。

よそ者コンプレックスと排除の論理であったり、異

文化圏に属する他者と一定のフレームに収めようとする。日本では、非常にフレームは構造化して、そこで人々を評価して見ていく。お互いを認め合い一緒に成長する、というパターンではなく、あなたはフレーム化されたこの枠組みの中で、あなたの役割期待される役割を演じなさい…非常にこれに私は悲しく思いました。

そこからもう一度、この概念を整理してみたい。まずグローバル化の定義ですが、ヒト・モノ・カネ、そして情報が国境を越えて自由に行き来し、それらの価値は一国の判断で決められないのが重要でしょう。

もう一つ、グローバル化と国際化を混同したらいけない。国際化というのは20世紀で終わったと私は思っています。21世紀はグローバル化の時代だと、私は認識しています。更に共生社会の話も入れて、ダイバーシティとは何か。人種、性別、宗教、性的嗜好、社会的経済的背景および民族性の個人間の違いが存在するということ、これを認識するだけでいい。あんまり大きさにせず、さまざまな背景、属性を持っている。これが違うんだということを認識するだけでいいと思います。

でもダイバーシティというのは、マイノリティを優遇するのではなく、先ほど総長の話に出たように、マジョリティの意識改革である。実は、マジョリティだと自分では思っている。自分が選択するんじゃなく、それが便利だと、あるいはマジョリティになることが無難だとそう考えている人が多いと思っています。

私はそういう意味で、非常に日本で感じたのが、異文化と接するのを苦手な人が多いということです。どういうことかと言うと、これは異文化を認識すると、文化スキーマなんです。我々は異文化と接する時に、基本的には長期に記憶したいろいろなものを情報というので、目の前にある人を見るんじゃなく、「記憶」でその人を判断する。

例えば中国人って言われた時に、中国人についてメディアから入ってきた情報を、全てそれを記憶したもので中国人を見てしまう。これが非常にステレオタイプが生まれやすいところでもあるし、排除につながることもある。だから異文化との接触で考えられる枠組みは、スキーマの違いで出てくるトラブルだったり、他者指定の違い、あるいはスティグマを前提とか、役

割期待ですね。この人は自分の文化の中で、こうやってやってくれるのは、こういう視点でしか理解できない、というようなことがよくあります。

もう一つ、「多様性」と「多文化共生」は混同してはいけません。これはフランスの事例なんですけど、フランスは夏になると、パリ・プラーージュがあるように、皆さんはプラーージュにいて日光浴したりします。実は、2016年にテロが多発した時に、フランスのいくつかの市で新しい法律を出して、この「ブルカ」っていわゆる「ブルキニ」っていうムスリムの女性たちが、肌の露出を出さないように着る水着を、これは顔が見えないという理由で、それを着たら罰金が取られ、その場で脱がされる。

これが多様性を認めるけど、独特の文化は認めません、と幾つかのURLを出していますので、時間があったら読んでいただければ。この「ブルキニ問題」で見えたっていうのは、フランス社会というのは多様性は尊重してはいるけど、多文化は尊重してない。これが排除の論理であろうと。外国人がやって来る時に、そういうことまで含めて考えなきゃいけない。

これは、スティグマについて考える余地があると思っています。そういうことで我々外国人に見られた時に、よくパッケージで判断されることが多い。パッケージで判断すると、スティグマ理論に落ちてしまう。だから「個」として見なきゃいけないというのが重要です。

日本社会の中で、個として認識はするけど、それを捉えていくのが難しいだろうと思います。もしかしたら、元々日本でもよそ者コンプレックスは排除の歴史があると思う。異文化圏が来ると、一定のフレームに収めて、そのフレームでしかその人たちを判断しない。それが差別の構造につながってしまう。これはフランス・ファノンが言った言葉なんですけど、alienationという排除の論理が構造化されて植民地時代から、これが細かく組み込まれている、支配層からよくあるんです。

だから外国人が来ると、ホストである日本人が支配層になってしまう。こういうような排除の論理を、彼は提唱しました。時間があったら是非読んでいただければ。

サイドもオリエンタリズムの中で言ってたのが、日本に対しても一緒なんです。西洋が非西洋をどう眺

めるかが、オリエンタリズムです。これを見ていく時に、日本の見方であろうがどうであろうが、西洋から見て「オリエント」という趣味の対象であるんですね。日本にやってくる観光客はそう見てと思うんですが、逆にやってくる外国人もオリエンタリズムという視点。見下すという視点で見られていることが多いです。

これがフランスが日本を見てる事例で、寿司グリルとか日本にはないと思いますけど、こういうのは日本的だと思ってしまうわけです。非常にアイデンティティを重視する大切さという大事で、人間は文化というメディアを通してしか、意味ある行為も相互作用もできない。これを言ったのがエドワード・ホールです。

彼は日本社会を見た時に、何で日本社会がこんなにコミュニケーションが下手なんだらうって、下手なかどうか言い過ぎかもしれませんが、日本社会が一番ハイコンテクストな社会である、アナログ型であると。

彼がどういうことを言ったかと言うと、直接的な言葉ではなく、文脈暗黙知を重視しながらコミュニケーションとる文化が、ハイコンテクストと言います。それに対して、ヨーロッパがローコンテクストである。日本は、空気を読む。これがハイコンテクストに当たる。社会が多様化していくと、空気も多様化するのには理解してほしいと思ってます。

私は学生たちと関わる中で、よく出てくる言葉。自分の主張を言わない、それはよくない。トラブル避ける…いろいろなことがあるんでしょう。でも、これから多様化する社会の中で思ってることを言わない限り、社会が協調されていかなと思う。日本人は協調性があると皆さん言われるんですけど、私はそれ違います、と指摘したいと思ってます。

というのは、いろいろな文化の背景の人達が住むとですね、オランダの学者が言ってるように、文化は学習の効果である。お互い尊重し合い、お互いから学び合えば、社会が新しい形の文化を作れる、と言っている訳です。この多様化する社会の中で、学ぶべきものと思っています。

外国から見て、日本は均質的な社会だと見える。学長になったのが2018年で、一番大きく記事書いていただいたのが、ニューヨークタイムズです。ニューヨークタイムズの記事見ていくと、「均質的な社会、日本社会でアフリカ出身の人は、なんで学長になれた

か？日本では私みたいなバックグラウンドの人は、学長という重要ポストがわずか2%しかいない」そういう風に取り上げた訳です。

これを見ていくと、日本では同じような教育背景を持っている。精華大学の入学式で、皆さんは黒いスーツを身に纏っている。非常にテンプレート化されたフレーム化教育。「日本人」という幻、と書いてしまったんですけど、日本人を『作っていく』という教育フレームがある訳です。

それに合わせて、皆さん疑問なしで作られてゆく。このフレームに合わない人は、変わり者、違った人。その人は疑問を持っていて、いろいろな価値観を持っている訳です。この写真を出した時に指摘したかったのが、皆さん男性がグーして、女性が手を合わせると指摘しようかなと思ったら、自分の息子がグーしてしまってる…どこで学んだやらなってちょっと腑に落ちなかった。

私はサッカーの監督を6年ほどやりまして、サッカーの監督をしてる時に、親に呼ばれて言われているのが、「ミニゲーム少なくしてください。基礎をやりましょう。全員同じ基礎をしましょう！」

サッカーだから全員同じも面白くないじゃないか、それを言っても、みんな一緒だという風に思われる訳です。私は小学校中学校にもよく遊びに行くんですけど、小学校低学年は遠慮ない。言いたいことを言う。「何で黒いの？」って聞かれて、テニス焼けて答えるんです。

彼らは何の疑問もないです。それが悪いと思っていない。でも学年が上がるにつれ、社会に揉まれて自分が言いたいことは言えない。自分の主張は言えない。自分の個性は出せない。非常に苦しい立場にどんどんなっていく。

日本の子どもは、個人として見ないでフレームとしてしか見ないことが、日常茶飯事と思われれます。

今回の講演会で、「民族と大学」ということで、民族の視点からも見てみたいと思ってます。まず日本社会と人権の問題を見ていくと、人種問題で日本は、グローバル化の基準についていっているか、私は疑問を持っております。

人権の普遍性、平等性は、全ての人間が同じ権利を持っている。これは無条件である、尊敬されるべき

と言われてます。だから先ほどのダイバーシティと一緒に人種、性別、国籍、出身、いろいろなものを背景に、みんな認められるべきだと言われてます。さまざまな自由も、さまざまな権利も認められている。これが基本です。

私はBLMの日本社会の動きを見ると、非常に疑問を持ったんです。皆さんは人種問題だから別に関係ない、とよく言う。でもそうではなく、私は人間の基本的な問題だって思った。構造的な差別、人種だけではなく、日本でも構造的な差別がまだ残っている。でもそれは声あげられない。だからブラック・ライブズ・マターの時に声あげるチャンスがあったから、世界的に広がったと思うんです。

私がこの問題にコメントをすることになってテレビに出たんですが、テレビに出た時に、私の名前の表記のテロップの書き方が凄く面白くて、下の写真を見てください。「黒人大学長」って書いてある。黒人大学長ってギャグかと思ってらるぐらいなんです。でも実は、黒人大学長って日本の放送用語で許されてる言葉です。世界的に見ると私はアフリカンボーンとか、なにになにボーンって言われるけど、黒人学長って言わないです。だから黒人大学長という日本で当たり前、何の疑問もない、しかも放送用語として普遍化されている、ということは、差別の構造化はまだまだ残ってるって思います。

自分の文化的アイデンティティはよく考えることがある。私はさまざまな国を訪れて、長期アフリカの外に住むマリ人として、文化的アイデンティティと、その表象が持つ意味の重要性を理解させられた。

アフリカの外に住む私たちは、常に自分自身の特定（規定・認識）、他者と自分、他文化と自文化の違いや認識に、疑問が湧いてくる。常に文化的アイデンティティ、その表象を求める。グローバル化と、固有の文化的アイデンティティは、矛盾しないと思う。

むしろ、グローバル化テクノロジーの進むことによって、多くの人に私は何者かというのは伝えることができる。アイデンティティはかなり重要で、それぞれの個性、固有のアイデンティティを持ちながら、社会は構造化されていくと思ってます。

グローバル化とアイデンティティの関係を考えると、生まれて死ぬまで一つの文化、社会の中で過ごすモデルは、もはやない。暮らしや学び、仕事の中には、

あらゆる国の人・物・仕組みがあふれ、自国の常識というものだけで生活していくというのは難しい。軸となるアイデンティティがわからなくなったり、それが壊されたりすることがある。

私はこのグローバル化の問題が、まず流されない、ということが重要で、それぞれ自分の軸をきちんとする。日本人というアイデンティティも例外ではない。教育は伝統によって引き継がれていく、ということが重要であると思ってます。

本当に国際化していく日本社会を見ていく時に、リチャード・セネットという学者も言ってたんですけど、日本人は排他的になっている、というのは自信のなさの裏返しではないかと言ってる。これを考えていた時に、真のグローバル人材というのは、学生たちも言ってるんですけど、自分のちゃんと足元をしっかりと見つめられる人。日本人である、自分はこの地域出身で、この地域の文化を持って大切にする。他の地域の文化を持って人達も、きちんと大切にする。これがグローバル人材の基礎ではないかと思っています。

今日議論の中でも、たぶん先住民の話が出てきます。時間もないのでさらいますけど、先住民というのは、実は定義がはっきりしてない。定義がはっきりしてないというのは、みんないろいろな捉え方をする。いろいろな乱用をするというのも、実はこの背景にあるわけです。

長年あるところと、歴史的にかかわった人が先住民だろうとか、いろいろなことは言われてるけど、そういうのを見ていくと、非常に重要なことだと私は思っています。Indigenous groupsとか、Ethnic groupsという風によく言われてますが、法律というのは、これからはっきりと言わなきゃいけない。

三段落目で書いてあるんですけど、部族、民族、先住民と呼ばれる集団は、世界の人口の約5%を占めている。でも、世界の貧困層の約15%を占めている、というのが事実であるというのは、非常にインクルーシブにされてない、インクルージョンがなされてないことが、かなり重要なポイントになってきます。

例えば、マリのドゴン族とか、素晴らしい文化的背景を持っていて、ドゴン族はマリのモプティに住んでいるんですけど、私も学生たちを連れて、ドゴン族のところに行きました。彼らが持っている文化的背景、

例えば宇宙観。今、世界文化遺産に登録されてはいるけど、昔のお墓であったりとか、あるいは彼らの住居の形は、人間の形をして、台所が頭になってるとか、こういうものを長年彼らが大切にしてきた文化の一つです。

ドゴン族が持つ神話は、世界的に認められる中で、例えば地元でそれが大切にされなかったりとか、先住民は一生懸命自分の文化を維持するのは、実はグローバル化と矛盾しない。グローバル化がやってきたから、あなたの文化が古臭い、とかではないと私は言いたかった訳です。トゥアレグ族も、同じようなことであろうと。トゥアレグ族は、女性を中心になって、女性の体の寸法で家が作られます。女性が建てたり、中心になる社会です。

最後にグローバル化社会は、私達がどう共生していくかが、基本的にはリベラルアーツと「旅」、ということ。いろいろな文化と出会い、いろいろなものと出会い、そこで学んでいくことが重要であると思ったりします。

例えば、私は学生たちにフィールドワーク、メタモルフォーゼと言って、他文化と接することによって、自分がどう変わっていくか。自分の「当たり前」が、当たり前じゃなくなった時に、どうなるのかは重要だと思ったりします。学生たちをマリーに連れて行って、マリーの文化を学ぶのは、マリーのためではなく、自分と出会うため、自分を発見するためである、自分が変化していくきっかけであると思ってます。

彼らは最後に、日本料理を作ってマリー人に振る舞うんだけど、自分がおいしいと思われるものが、実は通じなかったりとか、いろいろなショックを受けるわけ。でも、このショックの中に発見があるわけ。人間が持つ普遍的なものと、それぞれが持っている固有の文化との組み合わせで社会が作られる、ということです。

私自身は他者と出会うことによって、自分を再発見することを常に心がけて、自分を見つめ直しているということです。私はダイバーシティにしても、共生社会の実現にしても、欠かせないのがコミュニケーションである。

この写真は京都のあるクラブの中で、みんなでダイバーシティ、お互いの違いについて、語り合おうというイベントです。このイベントの中に、ちょっと下にある絵で障害者の方々が絵を書いたり、障害者のDJ

が音楽流したり、私たちが見て可能じゃないとかできないとか、勝手に決めつけるものが多い。でも、当事者とコミュニケーションを取ったことない。こういうのをどうやってなくして、共生社会を作っているかが、これから重要であると思っております。

「ソクラティック・ダイアログ」という方法があると思う。知らない人同士が喋る、お互いの理解を深めるのは、自分に対する理解を深めることにもなっていく。

かつて京都精華大学は、今コロナでやってませんけど、大学入門という授業で、学生たちがお互いに紹介し合う。絵を描いたり、言葉を書いたりとか、その中で「私」とは何者なのか。自分の認識と他者の受け入れは、こういうプロセスを通して理解することがある。

その中で一番重要だったのが、言葉であります。これはヴォイス（VOICE）と言います。実は皆さんが大学に入るまで、自分の言葉を持ってない。他人の言葉で喋ってるんです。でも、自分の言葉を持つのは、自分の認識と密接な関係がある。その言葉にメッセージを乗せるのは、初めてヴォイスになる訳です。そういうようなことをもって、共生社会が実現できると考えています。

私の講演会の最後によく出してる言葉ですが、答えの見えない世の中、不確定な社会的状況で大事なものが、論理的回答だけではなく、そもそも「問い」が立てられる力である。私達が何でも結論、答えを出そうとする。そうではなくて、「問い」にたどり着く勇氣、再設定する勇氣、この社会はいろいろな問題がある、いろいろな課題があるんですが、私たちは共生社会の実現に辿り着くと信じてます。

本日の北大のダイバーシティ&インクルージョンの推進宣言に期待をして、私の講演を終えさせていただきたいと思います。私の話は幾つかの本に書いておりますので、興味があったら読んでみてください。ありがとうございました。

加藤 サコ先生、ありがとうございました。結城幸司さんとの対談に向けて、今回のシンポジウムのテーマである「大学と民族」という議論をしていく上で、たたき台になる基礎的な提言っていうか、情報を非常にコンパクトに、しかも情報量を多くまとめていただいたことに感謝申し上げます。これからの議論が楽しくな

りました。正直申し上げますと、最初にスライドをいただいた時に、スライドが120枚を超えているのを見て、これは予定していた時間に終わるのだろうか？と、実はちょっと不安に思ったんですが、さすがですね。ぴったりなんです。

それでは、対談者のアイヌ・アート・プロジェクト代表、結城幸司さんをご紹介します。対談に移りたいと思います。よろしくお願いします。

サコ よろしく申し上げます。

加藤 結城幸司さんにつきましては、ホームページやお手元の資料の中で書かれていると思いますが、アイヌ民族出身の彫刻や、版画や音楽やさまざまな活動をされているアーティストです。

特に最近、フランス人のノーベル賞作家のル・クレジオさんとの出会いの中で、ループルでストーリーテリングを行われるなど、語りを使ったアイヌ文化を発信もされています。

サコ なるほど。

加藤 サコ先生、結城さん、それぞれ世界のいろいろなところで多様な人達と交流されており、共通したテーマをお持ちだと思いますので、この対談を期待しているところです。最初に結城さんから、サコ先生の講演を聞いた上のコメントや意見をいただきたいのですが、スタートとして共有したいのが、北海道大学が先住民族の大地である北海道にある大学である、ということだと思います。

この大学が、ダイバーシティ&インクルージョン推進宣言を出したことは、他の大学が宣言を出すのと違った意義、また意味を持っていると思います。まず結城さんから、サコ先生の講演を聞いてのコメント、大学に対する多様性に対する希望を含めてお話いただけますか。

結城 イランカラプテ（アイヌ語でこんにちは）結城幸司と申します。本当に言葉に引き込まれて、サコ学長が生きた言葉を喋られて全然長さを感じなかったです。

サコ すいません。

結城 僕も、この内容を見た時にはどうやるのかな、と思ったんですけど、本当にそう思いました。北海道大学の学長の宣言も聞き、サコ学長の宣言も聞いた後にふっと感じたことが、加藤先生がおっしゃった通り、先住民がいる土地での大学ってということでは、ダイバーシティ宣言があまりにも遅すぎた、と感じました。

ご存知の通り、アイヌ民族ってというのは、この国にいながら先住民と認められたのも、まだ20年も満たないこともあり、そして私たちに与えられた最初の法律が、「旧土人保護法」といって、明治32年にできた日本人と混ぜてしまうための法律だったんです。

ですからこの宣言を受けて、本当にサコ学長や、北大の学長の言葉には感動もしましたが、この遅過ぎた宣言が僕らの先輩方、先人方の多くのものを奪ってしまった。自分らがそれを放棄する…放棄はしてないかもしれないけど、自分らが考える、自分らのアイデンティティっていう想像力を失った時間に値するな、と思いました。

サコ学長がおっしゃった通り、アイデンティティを持ちながら、違いを認める社会、それを冷静に受け止めながら、日本を見る姿は感動的で、そうやって整理して、アイヌもそういう部分を整理し、この時代まで来たことを受け止め、次の時代に向かう。

僕らも変化の時を迎えていることは、感じさせてもらいました。「SDGs」とか、「ダイバーシティ」とか、僕は大学側の人間でもないし、学校で教える立場でもないの、ダイバーシティとかSDGsっていう言葉は、流行語のように、ラジオであったりテレビであったり、受け止めることしかしてなかった。

いつもこの言葉を聞くとき、それがばらばらに表現されていて、持続可能なダイバーシティっていう言葉がないんだなど。サコ学長の言葉を聞きながら、二つの言葉がこれから私たちが「人種」じゃなくて「人間」を見る、とおっしゃってましたけど、そういう社会を作っていく中で、持続可能なダイバーシティを意識する人間を見る社会になってほしい、と感じました。

近代から現代において、北海道はアイヌにフォーカスしながら、見て見ないふりをした時代も長く続きましたが、現代において、言葉一つでクレームが付く社会

になったので、都合、不都合を簡単に整理しながらやっている姿が、教育の場でも、私たちアイヌの中にもある気がします。

ここでダイバーシティ宣言をするなら、近代から現代に起きた事柄、例えば遺骨の問題にしても、一回受け止める。アイヌ側も、自分たちがアイデンティティを取り戻すには、自分たちのあり方ももう一回受け止め直すことが、サコ学長の言葉から受け止めた、僕の宣言でもあるかもしれません。

北大が北海道を開拓する、という目的で作られた部分があって、「ボイズ・ビー・アンビシャス（少年よ、大志を抱け）」っていう言葉があるけど、まさにグローバル宣言の後は、ビー・アンビシャス、少年だけではなくて、北海道の大地に住む人々が希望を抱けっていう宣言に代わってほしい。北大の持っている、元々持ってるグローバルな視点を、もう一回この大学が取り戻してほしい。私たち北海道に住む人間、アイヌもアイヌじゃない人達も、そういう考えに至ってほしいのが今日の感想、そう思いました。

僕も、自分からの視線でしか、サコ学長の言葉を捉えてないかもしれませんが、でもこの大学がこの宣言をしたことは、すごく大きなことだと思います。だから途中から緊張し出して、なかなか整理できなかったけど、私たちアイヌも変わるから、皆さんも変わろう、そんなことを感じました。

加藤 結城さん、ありがとうございます。今の結城さんからのコメントと、サコ学長の講演を聞いての返答ですけど、結城さんもおっしゃってましたし、サコ学長もおっしゃってましたし、総長も宣言を今日されたけれど、宣言で終わらせないために、大学はダイバーシティやインクルージョンを体現しなきゃいけない。実際キャンパスとして、形にしなきゃいけない。サコ学長の方から京都精華大学の「言葉に終わらせないための具体的な取り組み」がスライドで説明されていましたが、サコ学長から見て、例えば北海道大学に対して、こういう風に他の日本の大学をリードしてほしい、日本の社会のいろいろな側面を説明いただきましたが、こういう風に多様性を具体的に議論してほしいという、何かメッセージとか意見はございますか。

サコ ありがとうございます。結城さんの話を聞いた時に、心から喋ってるって感じました。嘘がない言葉で、フランクに語っていただいて、我々打ち合わせの時からも、フランクで行こうぜって言って、今日の言葉はそうなってます。

北大がダイバーシティを、あるいはインクルージョンを宣言したのは、遅すぎるとあったと思うんですが、実はオーストラリアでもどこでもそうなんだけど、「国家作り」と「社会づくり」の違いなんです。

国家作りは、基本的には国家の利益を優先して、国家の形はどういう風に国民に落とししていく、というところで、私は厳しい言い方ですけど、「日本人」という幻を作ったのが、日本の学校だと言いました。国家を作るために社会を作った。歴史を持っている社会であれば、社会が国家を作るという逆転現象がなかったのかなって思ったんです。

北海道行った時にめちゃくちゃ楽しくて、アイヌのいろいろな博物館、悪く言えば見世物だったけど、見世物でも親近感が湧いた。例えば、マリの民族の行動に似てるなとか。でも、何でそれを堂々と見せないんだろう？何で北海道に来るまで知らなかったんだろう？と思いました。

日本の国家作りの中で、社会づくりにはコントロールが行き過ぎたと思う。でも今は大学という自由な知性の場所、皆さんが考えて行動する政治にとらわれない場所として、今から「国家」ではなくて「社会」を作ることが大事だと思う。

社会を作る過程で、一緒に住めばお互いに学習する。それは一方的ではない。オランダの学者も言っていました。一緒に住めば、お互いの文化から学習していく。それが北海道の文化になる。北海道文化はアイヌの文化でもあり、大和の文化でもあり、開拓者の文化でもあり、結城さんが言ったように、歴史的な事実を反省しながら、我々が新しい社会を作っていくべきじゃない。

これは、北海道大学にとって一つのチャンスじゃないかなと思うんです。日本では、社会を作らなくて国家を作る。大学は失敗してるかどうか知りませんが、大学も一生懸命国家を作ろうとするんです。この間、ある方と講演会した時に、「大学が本来は畑であったのが、工場になっちゃった。」と。「(私が)工場って

「どういことですか？」と聞いたら、その方は「畑だったらどんな種を植えて、どんな芽が出てきて、どんな収穫あるか全く分からないけど、どきどきして期待する。それは学生だった訳です。でも、工場になってくると、入口から出口まで全部作られてる。殆どプロダクト作りですよ。」とおっしゃっていた。

だから私は、北海道大学がそうではなく、社会を作るのは不確定なものあるけど、どきどき感がある。アイヌの方々も、お客さんではない訳です。元々お客さんじゃない。皆さんがお客さんだけど、彼らがなぜかお客さんになった。インクルーシブの中で、お互いに学び合っていくのが重要じゃないか、とっています。

加藤 ありがとうございます。今のお話を聞いて、結城さんいかがですか？結城さんがおっしゃられたように、直視しなきゃいけない。北海道大学だけではなく、日本の歴史全体がそうですけど、やはり明治以降の国づくりの歴史の中で、例えば方言とか、いろいろな文化…日本列島が本来持っていた多様性を、塗り潰してきました。

本当はいろいろな多様性があったわけで、サコ学長の話もあったように、足元を見ると実は多様性は、必ずしも海の向こうの国と交流することだけではなく、足元にたくさんの多様性、アイヌ民族にしても、沖縄の人たちの文化にしても、近代って「日本人」っていう、幻想としての想像の共同体と言われますが、まさにそれを作ってきた。

アイヌの人たちの歴史とか、言葉はその中で塗りつぶされてしまった。前に結城さんと話した時に、言葉が見えなくなってるって話をしました。例えば札幌っていう町が、本来はアイヌ語の由来の地名であるのにそれを知らない人が、学生も含めて多い。

結城 そうですね。学校教育の場に行くことがあって、この土地の八割が、アイヌ語で漢字変換されて存在してる。子ども達にそういうことを言うと、そうなんだ、と。

中学生高校生たちによく言うんだけど、16にも17にもなって、自分が住んでる土地の本当の意味も知らずに生きる、それがたとえアイヌ語だろうとなんだらうと、私だけで納得して人生を過ごすのは、ダサいんじゃないの？って言ったことはある。

ないの？って言ったことはある。

加藤先生もサコ先生も言ってますが、「足元を知る」。サコ学長のお話にありましたが、自分たちでその土地、その大地の姿を、自分たちで学習する。日本の教育の中では、本州中心で北海道を見る教育になったり、本州中心に南側を見る。僕はそういう時代を生きてきたので、ここから本州を見ることも必要だし、南の方から本州を見ることも必要だし、この日本を眺めることも必要だって今日も感じたし、実感としてある。

本当に僕らもだらしがないです。僕がだらしがないのかもしれない。若い世代は、アイヌ語を取り戻し始めたんですけど、僕らの中には日本語教育があって、アイヌ語に変換する時に、日本語で考えて、アイヌ語に変える。サコ学長の、あれだけ正々堂々とマリの文化を語る姿は、羨ましかった。遅すぎたって言いましたが、落胆した訳じゃない。諦めの境地に立ったわけではない。それも、僕の受け止めなんです。そこからどうやって考えていこうかって。

「ビー・アンビシャス」であって、諦めではないので、それは分かってほしい。

加藤 どうですかサコ先生。サコ先生も話の中で、自分のアイデンティティをなかなか出せない、自己主張ができないことは、外で他者と交流していく時に、決してプラスに働かない。言えない状況がある社会は、当然変えていかなくちゃいけない。さまざまな自分のアイデンティティが大事で、多様なアイデンティティを主張できる社会にしていかなきゃいけない。社会を作るのは教育であり、学習によって文化ができる。大学が変わると、社会が変わることができる、とおっしゃいましたが、大学の役割って大きいですね。

サコ 先ほどの結城さんの話から、私はいろいろところで文章で書いてるけど、日本に来たことによって、よりマリ人になったとよく言うんです。初めていろいろなものが指摘されたり、言われたり。当たり前だと思ったものが、当たり前じゃなかったりとか、学生たちに「旅」に出てほしいというのが、そういうところで、異文化と触れることによって、自分自身を再認識できる。

結城さんがフランスに行ったり、いろいろなところ行ってアイヌのことを喋ることで、喋る度に修正入れよ

うとか、追加することが出てくるし、戻ってきたら調べたりする。自分をもっと知ろうとする機会があると思うんです。

このチャンスは非常に重要で、大学がその場を作ればいい。自然と出会うみたいになって、自然発生的なものはない、皆さんで体験する。これアイヌだけの問題じゃない、日本人を作るためにも大事。私はこんな地域出身で、この地域はこういうものがあるって言うために、それぞれの違いをぶつけ合うことが重要。

日本では、それをタブーにしようとするところがある。私はタブーにすることが、優しいと思ってなかった。先ほど中国の話をしたけど、お前黒いねって言われて、喧嘩して仲直りする。言われるから自分も認識したり、自分が人種認識したのがそこだった。でも、日本だったらしなかった。タブーにされてるから、触れてくれない。電車に乗って、ちっちゃい子どもが私を見て、ママって言ったら、バシッってするんです。私自身は挨拶するんだけど、一生懸命子どもが私を見ないように…。一生その子どもの中で、私タブーの存在なんです。それはいかんかって思う。そのタブーを破っていく。これ、大学でしかできないです。

大学だったらできる訳です。知識を求める人が多いし、情報を求める人が多いし、それ発信できる場所でもある。アイヌ社会と北海道大学が、より良い関係を作っていくのも、今回のダイバーシティ&インクルージョン宣言の中で重要なポイントとして期待したいと思います。

加藤 ありがとうございます。その通りです。今のお話と関連して、示唆的なことがある。結城さんが言ったこととも関係するんですが、2008年に、日本政府が正式にアイヌ民族を日本の先住民族と認め、2019年には新しい法律もでき、国のアイヌ民族とのかかわり方、アイヌ民族との関係の仕方は、外から見ると条件が整って良くなっているように見える一方で、北海道庁が行っている生活実態調査があって、アイヌ民族に自分の帰属のアイデンティティを感じる人の数が公表されています。

その数が、実は減っていったるんですね。国からのいろいろな支援や、サポートや文化の振興に支援が出てくる動きがある一方で、自分のアイデンティティを

強く出す部分が減ってる状況を社会の動きとして捉えてなきゃいけない。

一方で、アイヌ民族の若い人と話をしてよく聞くのは、海外の先住民族の人達と交流すると自分はどうして今まで自分のアイデンティティを強く出さなかったのだろうか、誇りを持てなかったのだろうか、ということに逆自覚して、よりアイヌ民族としての活動に力を注いでいくようになった経験を、複数の人から聞く機会がありました。

このような経験は海外に行つてはじめてできるのではなく、いろいろな国から留学生が入ってきたり、いろいろなその背景を持つて人たちが自由に自分のアイデンティティを出せる場所が大学にあったとすると、大学っていう場所が、そういう社会を変える。アイヌ民族のアイデンティティもそうですが、強い力を持つ場となることができると思います。

サコ先生が言ってくださった、大学の持つ役割は大きいと思います。結城さんいかがですか？大学に対する期待というか。

結城 大学というよりも、外に行くっていう加藤先生のおっしゃったこと、マリから日本に来て自覚すると聞くと、僕もインドネシアのジョグジャカルタに行って、アイヌが恵まれないイメージのまま行つたけど、もっと恵まれない人達がいて、IDさえもらえない人達が、ストリートミュージシャンやってる子ども達だったり、そういうジョグジャカルタの町でも、例えば子どもたちに教育を、大学生がパレードしたり、行進をしてた姿を見たり、外に行つて見えたことがあって、この国で決して恵まれない先住民ではないんですけど、そういう捉え方をしました。

あとはル・クレジオさん。僕がフランスにルーブルに呼ばれて、喜びで行つたんですけど、最後にル・クレジオさんが言ったのは、「このアートを見てみなさい。宗教戦争や、戦争、みんな悲しみや涙、それが世界中から集まって、それが美しいとか言ってるけど、全部そうやって泣いてきた、死んできた人たちの魂が、ここにある。」ということです。

なぜ私を呼んだのか、アイヌを呼んだのかっていうと、アイヌだけではなかった。吟遊詩人とか、アフリカのミュージシャンとか、この人たちがこの土地にやって

きて作ったのが、ループルって教えてくれた。

大学の話に戻りますけど、大学もそういう場所…悲しみも喜びもそこで学び、人間を学ぶ場所としての大学のあり方が、すごく大事だと思う。僕らの例では、アイヌって言うと、どうしても時代を止めて、古き良きっていう表現が多いんですけど、今を生きるアイヌとしてそこで主張もしたいし、京都精華大学がやる「アート」っていう切り口は、凄く大事。

北大にお願いするんですけど、アートギャラリーを作ってほしい。いろんな人たちが見ながら、アイヌ文化を感じてほしい。キュレートとすることで、学生たちも現代のアイヌ文化と、自分たちを公表できる場になってほしいと。京都精華大学もやってることをユーチューブで見ましたが、凄いなと思いました。この北大がもし、本気になってそれに取り組んだとしたら、国際的な人たちがやってきて、この大地を学ぶ感覚、大地を学び社会を作る感覚を、学生たちも持てる。

加藤 サコ先生に聞きたいんですけど、大学ってキャンパスって言い方しますけど。大学の良さって、地域コミュニティや社会に対して開かれていることですよ。大学をつくっていくのは、学生と教職員だけではなく、地域の人たちも一緒になって作る事が大切でないか。

結城さんの提案にあった、北海道大学の中に先住民のアートギャラリーができ、大学という空間が、地域と接する接点として、アートの力を借りることができるんじゃないかと思います。先生のところはアートの学部もある訳で、アートと大学との関係性という意味で、結城さんの提案はいかが思いますか？

サコ まず声掛けてください。私たちが参加しますので。元々大学は、政治ができない国ができないことは、大学はできるんです。アートという表現で世界を変えていくのはそういう意味で、アートも広く捉えていいと思う。

表現も一緒だと思うし、言葉であったり音楽であったり、絵であったり行動であったり、いろいろなことは含まれる。今はアート以外のものは、全部予期するようになってる。論理的構造になってる訳です。でもアートだけ、発信する人と受け取る人の共感が重要。この

共感が、我々の社会の中で少なくなってきた。共感しないんです。もう全部分かってしまう。

例えば、物買う前に内容を読んでしまったら、手に取った時に何の感動もない。だから共感しない。でもアートだけは、我々に共感を持たせているということ。この共感を大事にしていくのは、一つの社会が求める方向性と思う。だから、アイヌの文化というのは、いろいろな共感を通してそれを理解する、それと接していくのが重要だと思うし、アートギャラリーは、大学の中にあってもいいと思う。

特にギャラリーとか、いろいろなワークショップ、地域の人達がそこに入ってくる。大学の人達も、そこにやっていくと。

まだ宣言だけど、作るんだったら精華大学はパートナーとして参加します。是非一緒にやりましょう。大学で喋ってはいけないのは、「日本は単一民族」って言葉です。だから私達は、決してこの大学でそれは言わない。単一民族じゃなかったらどうなるの？って逆に聞きます。でも、その答えも隠されているところにある。

私は毎年、学生たちを北海道に連れて行って、いろいろところでいろいろなものを見てきました。しかし、共感を得られるような場所は、少なかった。共感を得られるような場所は、大事だって思っております。そこはぜひよろしくお願いします。

加藤 北海道大学のキャンパスの中には、「サクシコニ川」っていう川が流れていて、まさにアイヌ語の川なんですね。大学のキャンパスの中に、アイヌ語の名前の付いた川が流れていることが、北海道大学の一つ誇りになる。札幌は作られた時に北一条西十五丁目とか、碁盤の目で地名が消えてる街です。大学の中に、アイヌ語の地名が残っている川が流れているのは北海道大学の財産だと思う。結城さんの中で、北海道大学のキャンパスをアイヌの人たちにとって、どういう場所として残したいですか？

結城 チャンスがあって外に行く、海外に行くことがあって、カナダにしてもオーストラリアにしても、街のカラーとしてのアート、それが先住民のアートだったりします。日本の各空港も大学も、デパート化し過ぎて、もちろん経済が大事なのは分かるんですけど、特

色を持ったものとしての存在感を薄くして思う。

僕はアーティストだからアートギャラリーを作ってほしい、ではなく、駅からこの近さで、北海道らしさを何のプレッシャーもなく発揮できるのが、北大だと思ってる。この構想が行くことによって、すごく希望を持ちます。

やっぱりアートっていうのは、壁のないものなんです。アートや音楽って、壁が存在しない。悪ければ悪いと判断されるし、アートの価値観みたいなのを、日本の大学ってアートを発信しづらいと思ってますけど、精華大学は別にして、壁のない分野を作るのも、大学の役割の一つではないかと考えます。

加藤 予定した時間が迫ってきてるんですけど、サコ先生が先ほどおっしゃった、政治家が日本は単一民族国家と言って論議を巻き起こしたり、周辺の国から批判を受けたり、講演の中でも触れてらっしゃったんですが、日本の学校教育が幻想的な日本人を作り出してきたとおっしゃった。幻想的、型にはまった日本人を作る教育をやってきた。大学における教育って、日本人向けとか、外国人留学生向けって分ける必要性ない。サコ先生も本に書かれていましたが、留学生も日本人の学生も、同じように大学の中で学べる教育をしなきゃいけない。

でも大学では、日本人学生向けの授業、留学生向けの授業に分けがちです。これが解消されないと、本当の意味での「地球人」を育てる教育になっていかない。その辺りいかがですか？精華大学は方向性が見えてきていますか？

サコ そうですね、難しい。日本ではまだ時間がかかる。教員たちもそういう価値観で教育を受けてきたし、自分が教育する学生は、そういう見方かもしれませんが、私は一番最初にダイバーシティの定義をした時に、「マイノリティがかわいそうだから、マイノリティを優遇しましょう」はやったらいけない。

マジョリティと思われているものも、本当にマジョリティは誰か分かんない。しゃあなしで、そのグループに入る、しゃあなしで、自分の主張を言えない。よく見たら隣の人、隣の隣の人って、いろいろな方が自分の周りについて、そこを認識しないでマジョリティに属してしまうことがある。

私はマジョリティの意識を改革、変えていくことをポイントにしてる。そうしないと、マジョリティがマイノリティに対する捉え方が変わって、マイノリティが孤立していくことになっちゃう。日本の大学の教育は、分けがちな文化がある。

私たちは、数年前から入試でさえ分けない。留学生も日本人学生も、同じ入試を受けて入ってくる。受験番号で受けてるから、何者かは分からない。ふた開けてみたら、国語の1位が留学生だったりする。同じ平等のチャンスが与えられてないだけ。

たぶんアイヌ、アイヌとかで言ってるのも、アイヌとアイヌじゃない人に、同じチャンスが与えられてないから、今までアイヌという社会が孤立化されたものになってしまう。その意識を取っ払って、同じ人間としてどう生きていくかっていうところ。どういう風にこの社会を作っていくかっていうところ。

コミュニケーションとか共感が重要で、結城さんがアートを出した訳です。私たちは何をやってるかと言うと、一年生の教育は重要だと思う。それまで高校で受けてきた日本の学習指導要領の問題点も含めて、大学生になっていく中で、自分と向き合える姿勢は重要だと思う。

自分を束縛してることが多い、日本の若い人たちは。自分の個性で自分を不自由にしてしまう。自分の特性で、自分を不自由にしてしまう。どうやって自分を解放していくかが重要で、役割期待に答えない。自分自身が生きたい生き方で生活できるかは、これは絶対教える必要があると思う。本当の意味での自力・自立は、実は教えられてなくて、留学生を見るとそれができたりすることもある。これを国によって違うかもしれないんですが、混ぜることによってお互いから学び合っ、お互いから影響し合っていくことが大事だと思う。

留学生が増えてくる中、ある親から聞きました。日本人が少なく、留学生が増えると学習能力は低下するんじゃないかと。それは、元々その人は学習能力は低下してる。留学生の存在じゃない。そういうステレオタイプ化されたマイノリティが混ざることによって、自分の育てた子どもが悪くなることは、絶対変えていかなきゃいけないと思う。

混ざっていく文化は普通だと思う。大切にしなきゃいけないのが、そういうところだと思う。決して大学

でもフレーム化をしない。フレームの外の人、悪者になっていく扱われ方しかない。フレーム化をしないのが、大学の特徴だと思います。

加藤 ありがとうございます。チャットで質問を取り寄せているんですが、お話が面白くて、私の司会のつたなさで、たくさんの質問を取り上げることができなくて申し訳ないと思っています。

質問に、【ダイバーシティ推進を北大がこれからしていく上で、北大のダイバーシティ推進必要だと思うんですが、ダイバーシティ&インクルージョンを進めていく中で、注意しなくてはいけないことは何か】という質問が来ています。結城さんからいかがですか？例えばこういう部分には注意してほしいというものがありますか？

結城 今日のまとめみたいになっちゃうけど、大学に限らず、このダイバーシティ宣言…この一連の宣言の中で、僕らがやらなくてはならないことは、もう一回出会い直すってこと。

出会い直すって言い方は、日本語がどうか分からないですけど、出会い直し、捉え直すことを堂々とやるっていうこと。北大は、ダイバーシティ宣言にとらわれ過ぎて、サコ先生が言ってましたけど、誰かに認めてもらうための大学ではなく、自分たちが認める大学。これはアイヌも言えて、アイヌ以外から認めてもらうためのアイヌではなく、自分が認めるアイヌになることが、この宣言の中にあってほしい。大学の注意しなきゃならないところだと。

この宣言を偽物にしないためには、出会い直して捉え直して、いい出会いとしてもう一回作り上げていく覚悟は必要じゃないかなと。

加藤 ありがとうございます。サコ先生いかがですか？

サコ 結城さんの話にすごく近くて、ファッションになってしまうといけない、ということです。SDGsも何でも、名前付ければってなってしまう。宣言というのは推進宣言なので、これから推進していく「始まり」なんです。もうなっちゃったつもりでは駄目。私の大学も、ダイバーシティ推進宣言をして、センターを作って、よ

くメディアが精華大学は多様性のある大学ですね、サコが学長だと…私が学長になるのが始まりで、完成形ではない。そこは重要だと思う。

これから真摯にいろいろなことを受け止めてやっていく、というのが重要だと思う。だから、これまで硬い姿勢ではなく、受け止めて対話の場を設ける。ダイアログって言ったけど、対話の中で北海道大学も学ぶ。決して専門家ぶつたらいけないんです。

いろいろな町、社会、地域の人たちの話を聞き、パイオニアになっていこう。国ができないことは、大学はできるって私が言って、いや北海道大学は国立大学だからできないんじゃないかって、そういう質問が出てるんですけど、実は国は、どっちかという政治姿勢を示しますね。

でも大学は知性というものがある。知識の蓄積の場所なので、国は決して口は出さないけど、研究分析によってできることはある。これまでの北海道のことも触れなかった話を、大学は研究対象として取り上げることができる、と思う。

でも大学は、そこまでの自由がなければ難しいところもあると思う。私は、大学が知識の自由が担保される場所として、ダイバーシティにまつわるタブーを研究していただきたい。

注意しなきゃいけないのが、何でも知ってるつもりでなく、完成形ではないとまず理解して、いろいろな人と協力すること、というのが重要と思っています。

加藤 ありがとうございます。実は話は尽きないんですけれども、予定していた時間が8時と決まってるので、この組み合わせだと朝まで続け、テーブルの上に「おいしい水」がないし、サコさんは飲まないかもしれないけど。今回はオンラインになってしまいましたが、サコ先生に札幌に来ていただいて、この続きをお話したいと思います。

今日いただいたお話の中で、大学とは文化である。文化は学習によってできる。大学って人を育てていくところで、人を育てることによって、社会が変わる。大学の持っている本質は、とても大きいと思います。

今日のお話も、大学の中でうまく受け止めて、まさにダイアログ、対話を続け発展させていきたいと思っています。今後とも是非、いろいろご助言ください。